

[講演要旨]

100 年前「米神で何が起ったのか」

今村隆正(株式会社 防災地理調査)

§ 1. はじめに

筆者は、日本全国 47 都道府県毎に、歴史時代に発生した土砂災害の調査研究を続けている。

本年 2023 年は、神奈川県各地で大規模な土砂災害を発生させた、大正関東地震(関東大震災)から 100 周年の年であることから、この災害において、今までに未解決の事例を中心に改めて調査を行った。

本発表は、未解決事例の一つ、神奈川県小田原市米神(当時は片浦村)の山津波災害について、新たに判明したことを発表するものである。

§ 2. 明白なことと未解決なこと

米神は、南隣の根府川の白糸川の山津波と同様、水無川の山津波に襲われ、62 人が犠牲となったことは明白になっている。しかし、その山津波の発生源、到達時刻、氾濫範囲においては、明確な記録もなく、その後も詳細な調査が行われてこなかった。

発生源に関しては、集落の 30 町西方の日向山と称する蜜柑畑、一里半程奥の岳向など、資料により複数の異なった情報がある。しかし、30 町あるいは一里半も上流となると、米神から計測すると、分水嶺の尾根(ターンパイクの辺り)を越えてしまい、一里半ともなれば箱根の須雲川の谷へ至ってしまうのである。

到達時刻についても、明確に記された資料は存在しない。また、氾濫範囲についても、何らかの根拠に基づいて線引きされた資料は存在しない。

このように、山津波の発生源や到達時刻、氾濫範囲については、災害直後から現在に至るまで、明確な記録も、詳細に調査された成果もなく、未解決のまま現在に至っているのである。

§ 3. 新たに調査したこと

1) 発生源の検討

山津波の土砂は山崩れの土砂(流下途中の溪岸が削られた土砂も含まれる)である。上流部のどこかで山が崩れ、その斜面に含まれていた地下水、あるいは斜面直下の川水などが伴わなければ、山津波としてある程度の距離を流下することはない。

前述した、日向山と称する地名は、古老に尋ねても聞いたことがないという。しかし、岳向という地名は存在し、地形判読をすると、その地点には山崩れ跡地形も確認され、山崩れした跡地は「猿ころがし」と呼ばれ、伝承が残っていることが確認された。

2) 到達時刻の検討

山津波が米神集落(ネブカブラ)へ到達した時刻を明確に記した記録はない。今となっては、被災者も亡くなっているため、ヒアリングも不可能である。根府

川と同様に、当時の人々の避難行動の手記から推測するのみであり、手記と伝承の分析を基に推定した。

3) 氾濫範囲の検討

山津波による土砂は、鉄道の築堤(土羽)より上流にあたるミズカブラを埋没させたのは明らかとなっている。土羽の下側を、手記や伝承より推定した。

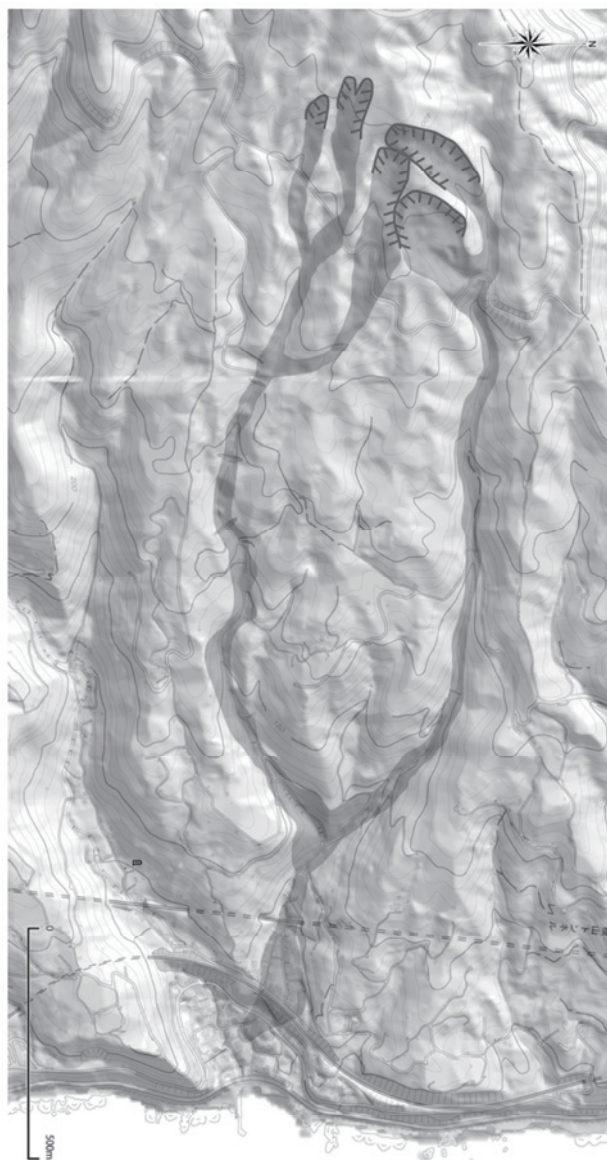


図 1 米神の山津波災害状況推定図
(地理院地図を使用)

§ 4. まとめ

100 年前、米神で 62 人の方々が犠牲になった、山津波の発生源、到達時刻、氾濫範囲について、資料調査、伝承調査、地形判読調査、現地調査を基に改めて調査を行い、土砂災害状況を再現した。